

ひかる石のおはなし、ぼくだったら。

1年 1・0くん

「この本は、ある田舎に住むお母さんがしてなでしまいかなくてわらわないじゃぶらなぐなつてしまつた男の子のおはなしです。」

ぼくは、お父さんお母さんいもうとの四人かぞへです。

もし、ぼくのお母さんがとっせんしてしまつたら、ぼくもかえでくんのようになれともしゃべらず悲しみのかたまりが出てひきこもつてしまつと思ひます。

ぼくもかえでくんと同じで、きゅうりゅうの化石やアンモナイトやげんせきがすきです。

だからお母さんとみくはくぶつかんへいきました。

お母さんはキラキラしたほうせきがすきだといつていたので、きつとぼくのお母さんがしんでしまつたらかえでくんのお母さんが石になつてかえでくんの前にあらわれたようにぼくのお母さんはダイヤやマンダになつてぼくのそばにいってくれるだろつと思ひました。

かえでくんのお母さんのようにぼくのお母さんにもいいところはたくさんあります。

その中でも、お母さんのおいがぼくは大好きです。

お母さんにきゅつとだきついで、お母さんのおいをかんじることができなくなつたら、かなしくてたまりません。

きつとかえでくんは、家にかえつてお母さんにおはなしをしたいことがたくさんあるのだと思ひます。

ぼくもがっこうのかえりみちにきれいな石をひろつたりするのでかえでくんのきもちがよくわかります。

きれいな石をひろつたらまずいえにかえつてお母さんにみせたいです。

かえでくんも、きつとそつたつたとおもひます。

だから、石がひかつてかえでくんは「お母さんがこたえてくれた!」と思つたのかもじれないとぼくはかんがえました。

どうして「ひかる石なのか」とぼくはふしぎでした。

でもぼくはかえでくんがお母さんとはなしをしたいと思ひきもちが石をひからせたのだろつとおもひました。